

《教育長メッセージ 第66号》



『夏の山々』

夏山と冬山、どちらかが好きですかと聞かれたら、冬山です。

冬山については、冬の頃に機会があれば、ずいぶん前の記憶ですが、その魅力などを述べてみたいと思います。

今回は夏の山々について、想いを述べてみたいと思います。

大学の4年間、夏は、1週間から10日、夏合宿で山に入りました。

4年生の時は、教員採用試験も受けずアラスカにいました。

1、2年生は、北アルプスを縦走しました。3年生は、北海道の山々を巡りました。

夏合宿は、キスリングに目いっぱい荷物を詰め込みます。10日分の装備と食料、衣類等を詰め込むとパンパンです。重いです。日を追うごとに、燃料と食料を消費した分は軽くなりますが、雨が降ればテントは重くなるし、予備食の担当となれば下山まで背負うことになります。装備や食料の分配は、学年が上がるにつれ配慮されます。軽くなります。

装備では、1年生が一番重い本体テントを割り当てられることが、ひとつの勲章でした。先輩から体力と根性が認められたということだからです。

入山日、重い荷物にあえぎながら稜線まで登るのが試練でした。体が山に慣れるまでは、フラフラで一日の行程を終える状態でした。

日を追うごとに体が山に慣れてきます。夏合宿は、梅雨明け十日の好天の日が多く、汗は書くのですが、湿気が少なく、稜線を吹く風はさわやかです。それでも日に日に汗臭くなり、ついには、それも気にならなくなると、山に馴染みます。

夏山の魅力は、なんと言っても、短い夏に咲き誇る高山植物たちが演出する別天地の景色です。

山々のそれぞれの形と風と雲と青空と花々が目の前に、見たことない空間として広がるのです。

「どこでもドア」ではなく、ふうふう言いながら辿り着く景色です。

私は、登山靴を屋根裏部屋に放り込んで30年、もう、アルプスの縦走は無理だなあとと思っています。また、長い長い時間をかけて学生の頃のように山に馴染むことは、できないだろうなと思うのです。

でも、心の端っこでは、もう一度行きたいなあとと思っています。

先日、職員と山の話をしていました。

そこで、ふと、頭に浮かんだのは、槍や穂高、剣や後立山、ハヶ岳や中央、南の名峰たちではなく、双六岳でした。

また、双六に行ってみたいと思ったのです。

1年生の時は、烏帽子から裏銀座の縦走で双六にキャンプしました。そして、西鎌尾根をたどって槍穂高を超えました。

2年生の時は、薬師、雲ノ平から双六に着きました。そして、笠ヶ岳を超えて新穂高温泉に下りました。

双六岳は、実は、丸みを帯びた豊かな山容の山ですが、記憶の中では大きな丘のような感じで思い出されます。

ハイマツに覆われ、なだらかに続く登山道には、チングルマが風に揺れます。頂上はもちろん、双六の小屋に向かう下り道は、槍に向かって視界が開け、絶景です。北鎌尾根のギザギザは、山登りを始めたばかりに私の挑戦意欲を掻き立てました。

テント場となる双六の池の周りには、高山植物が咲き誇っていました。

私の夏山の真っ先の思い出では、3千メートル級の山々ではなく、双六岳にありました。

なぜなんだろうと、自分でも不思議ですが、体が山に馴染み、仲間と笑顔で過ごした時間が双六にあったんだろうと思います。

夏休み、みなさんの行きたい場所はどこでしょうか。

私の行きたい場所は、北アルプス裏銀座の双六岳です。

次回は、「子どもの声」について、私の思いを述べてみたいと思います。